

ならざき まさかず
梶崎 正員

1620（元和6）年～1696（元禄9）年

江戸時代の学者です。

家は、三原でみそ・しょうゆをつくり販売していましたが、正員の代には薬屋をはじめました。よく働いたので、仕事もうまくいきました。

生活も落ち着いてくると、自分の無学が気になり、人間としての生きる道を勉強したいと思うようになりました。そこで中国の学問の本など買って勉強しましたが、数年かかっても本当の意味がよく分かりませんでした。

54歳のとき京都に行き、えらい学者であった山崎闇斎について学び、よく努力して優秀な成績をおさめました。

これを知った4代三原城主の浅野忠義は、正員をしばしば城中にまねいて学問の講義をさせ、とくべつなもてなしをしました。

60歳のとき、大阪の薬屋に支払いの残金を持って行ったところ、主人が代わっていてよくわからず、引き継いだ人にどうしても受け取ってもらえなかったため、そのお金で石の鳥居をつくり、西宮の八幡宮に寄付したといわれています。

62歳になって須波に住み、すきな本を読むという生活にはいりました。そのころの須波の海岸には波止場がなかったので、波風のはげしいときには舟が帰れず、ときにははてんぷくすることもありました。これを知った正員は自分のお金で波止場をきずいて、村人に大変喜ばれました。この仕事をほめたたえた石碑が、今も別荘跡に残っています。

西町の大善寺にあるお墓は、県の史跡になっています。



梶崎正員と須波の波止場